

中年期夫婦における関係の満足度, 問題対処, 感情との関連

野 澤 真由美*

In Relation to Marital Satisfaction, Coping with Marital Problems, and Emotion at Middle-aged Couples.

NOZAWA Mayumi

abstract

A survey has been conducted with 277 middle-aged married couples (133 male and 144 female) to examine the relevancy among the following three subjects: strategies of coping with marital problems, emotion arose from coping with problems, and the marital satisfaction.

Hypothesis (1) asserts that Japanese couples have the same aspect as Western couples. Hypothesis (2) and (3) are set up to verify the influence of emotion upon relationships in Japanese couples.

Hypothesis (1); As Western married-couples, positive coping strategies would lead to a high level of marital satisfaction, and passive coping strategies would lead to a low level to marital satisfaction.

Hypothesis (2); Regardless of coping strategy, high level of positive emotion would lead to a higher level of marital satisfaction.

Hypothesis (3); A negative emotion arose from coping with marital problems would be less related to a level of marital satisfaction than coping strategies and positive emotion.

As a result, hypothesis (1) was proved. Hypothesis (2) was not proved by both genders. However, it was found that “positive emotion” in female would influence the marital satisfaction to some degree. Hypothesis (3) was proved by both genders; “negative emotion” would not be related to the marital satisfaction.

Keywords: Middle-age, Couple, Marital satisfaction, Coping, Emotion

問題と目的

中高年期には、身体の変化や子どもの巣立ち、老親の介護、退職などの様々な危機が存在すると考えられている。また、夫婦として生活する間には、家事分担や親戚との関係、子どもについてなど、様々な問題が生じるだろう。いざこざや問題を経験しながら、それに対処し、安定した夫婦関係を築くのに、プラスに働くものは何だろうか。

欧米の研究では、夫婦で問題に積極的に取り組むことが夫婦の満足度を高め、問題を回避すると満足度が低くなることがわかっている（例えば、Moller, Feeney, & Peterson, 2001）。日本において、門野（1995）は、妻のみの調査で、夫婦に問題が生じた時、話し合いによらない暗黙の了解よりも、話し合いによる合意のほうが、夫婦関係満足度が高い傾向にあることを見出している。また、大和（2001）では、夫が妻の自己開示をうまく受けとめると、妻の結婚満足度が高まる。伊藤・相良・池田（2006）では、会話時間と自己開示度が多くなるほど、

キーワード：中年期、夫婦、結婚満足度、対処方略、感情

*平成14年度生 人間発達科学専攻

子育て期夫婦の関係満足度が高い。日本の夫婦においても、欧米の夫婦と同じく、配偶者と積極的に関わる対処方略のほうが、問題を回避し配偶者との関わりが消極的な方略よりも、夫婦関係満足度が高くなるだろうと考える。

一方で、問題へどう対処するのかだけでなく、対処をする時に夫や妻がどう感じたかが、夫婦関係に影響するのではないかと考え、夫婦の感情に着目した。夫婦の葛藤において、夫婦の情緒的安定性が低いと、子どもの適応問題が生じるという報告 (Cummings, Davies, & Campbell, 2006) があり、夫婦の葛藤時に生じる感情は注目に値する。

欧米では、夫婦関係満足度の高さと肯定感情の多さ、夫婦関係満足度の低さと否定感情の多さに、それぞれ正の関連があることが報告されている。(例えば、Bradbury & Karney, 2004; Driver, Tabares, Shapiro, Nahm & Gottman, 2003)。日本の夫婦も、肯定的な感情は、欧米の夫婦と同様に、夫婦関係と関連するだろうと思われるが、否定的な感情については異なる様相を呈するのではないかと考える。アメリカの夫婦は、対立は配偶者が自己主張し要求を再交渉する機会、健全で避けられないものとみなすのに対して、日本の夫婦は、対立を容易く受け入れず、つながりや心を読み取することを大事にする (Rothbaum, Pott, Azuma, Miyake, & Weisz, 2000)。日本とイギリスとの比較研究 (21世紀ひょうご創造協会・兵庫県家庭問題研究所, 1991) では、夫婦喧嘩の回数を比較しており、日本は「年1、2回」(夫41.5%、妻40.0%)、イギリスは「月1、2回」(夫36.8%、妻38.6%) がトップに挙がっている。“けんか≡不平や不満の否定感情”と考えると、日本の夫婦は否定感情を感じる程度や頻度が少ないのではないだろうか。また、善積 (2004) は、日本とスウェーデンの夫妻の家庭生活における比較研究を行い、日本の妻が、家庭円満のために対立を回避し、不平や不満があっても黙っているというような、対立それ自体を自覚・意識させない不可視的な力が作用していると述べている。愛情に基づいて関係が成り立っている欧米の夫婦とは異なり、永続的な誠実さや情に基づいて関係が成り立っている日本の夫婦は、対立を避けて調和を保ち、関係を続けることを大事にするので、夫婦としての関係を持ちつづけるのに相応しくない、否定的な感情を押し込めたり、消したりすることが考えられる。これらからは、欧米の夫婦とは違う日本の夫婦の姿がうかがわれ、否定的な感情が夫婦関係に影響力をもたない可能性が示唆される。

以上から、次のような仮説を導いた。仮説1は、日本の夫婦について、欧米の夫婦と同じ結果かどうかを確認し、仮説2と仮説3は、日本人の夫婦関係に及ぼす感情の影響を新たに検証するものである。

仮説1：問題への対処方略が、配偶者と積極的な関わりをもつものであれば、夫婦関係満足度は高くなり、消極的なものであれば、夫婦関係満足度は低くなるだろう。

仮説2：問題への対処方略よりも、対処時に抱く肯定感情が多いことが、夫婦関係満足度を高めるだろう。

仮説3：問題に対処する時に抱く否定感情は、問題への対処方略や肯定感情よりも、夫婦関係満足度との関連が低くなるだろう。

方法

1. 目的

中年期夫婦の問題への対処方略、問題対処時の感情、夫婦関係満足度との関連をみることを目的とする。

2. 調査方法

対象：夫と妻のどちらかが40歳代、50歳代の夫婦を対象とし、夫と妻それぞれに質問紙調査を行う。知り合いや大学生の両親への配布と、首都圏のある女子大学の卒業生名簿から無作為に選んだ方へ郵送をし、いずれも回収は郵送で行う。

質問紙：2001年10月～11月に実施。内容は以下のとおりである。

- (1) 属性 (年齢、結婚年数、職業など)。
- (2) 夫婦関係満足度：袖井・都築(1985)の結婚満足度尺度 (13項目) と、菅原 (1997) の夫婦の愛情尺度 (10項目) を組み合わせ、夫婦関係満足度を測定する。「非常によくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの7段階評定。

- (3) 夫婦間で生じる問題について：①配偶者との問題で最も重要であると思われることは何か。②いつ頃からいつ頃までのことか。③どの程度の問題だと考えるか。「全く深刻ではない」から「非常に深刻」までの5段階評定。
- (4) 問題への対処方略：Bowman (1990) のMarital Coping Inventory (64項目) を和訳し、64項目中1項目は日本の夫婦への質問にふさわしくないため削除し、63項目にて予備調査を行う。その結果得られた5因子25項目にて実施。「いつもそうだ」から「全くそうではない」までの5段階評定。
- (5) 問題に対処する時の、配偶者への感情：予備調査の結果得られた肯定感情と否定感情それぞれ6項目を、「いつも感じる」から「全く感じない」までの5段階で評定。
- *結果の分析には全て統計ソフトSPSS 10.0を用いる。

3. 対象者

質問紙は、277名分（内、男性133名、女性144名）が回収され、有効回収率は20.4%であった。対象者の平均年齢は、男性52.2歳、女性49.0歳、平均結婚年数は、男性24.1年、女性23.7年であった。

4. 各尺度の因子分析と信頼性の検討

(1) 夫婦関係満足度

男女それぞれにおいて因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、夫婦関係満足度尺度は1因子であることが確認された（表1、表2）。

(2) 問題への対処方略

問題対処方略尺度25項目で、男女合わせて因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、5項目ずつで構成される5因子が抽出された（表3）。因子1は、問題を自分で抱える方略で、「内省」と命名した。因子2は、配偶者と向き合い、建設的な解決を模索する方略で、「積極的アプローチ」と命名した。因子3は、配偶者やものに攻撃的になる方略で、「葛藤」と命名した。因子4は、問題に直面するのを避け、他のことで気を紛らわせ

表1 《男性》夫婦関係満足度の項目と因子負荷量

項目	因子負荷量	共通性
20. 妻と一緒にいると、妻を本当に愛していることを実感する。	.828	.685
2. 妻は私に思いやりを示してくれる。	.824	.679
12. 全体的にみて私は妻に満足している。	.815	.664
18. 妻のためなら何でもしてあげるつもりだ。	.812	.659
10. 私が何かしようとする時には妻はたいてい励ましてくれる。	.809	.654
19. 妻は魅力的な女性だと思う。	.806	.650
17. 妻は言葉に出さなくても私の気持ちを理解してくれる。	.784	.615
15. 妻を一人の人間として深く尊敬している。	.778	.605
8. 妻は私の欠点だけではなく長所も認めてくれていると思う。	.772	.596
5. 妻は私がこれまで成し遂げてきたことを認めてくれていると思う。	.771	.594
9. 妻は毎日の生活を楽しく意味のあるものにするよう努力してくれる。	.758	.575
1. 私は妻といると安らいだ気持ちになれる。	.754	.568
13. もう一度生まれ変わるとしても同じ人と結婚したいと思う。	.751	.564
16. 妻が幸せになるのが私の最大の関心事だ。	.722	.522
11. 妻は私が生きがいをみつけられるよう助けてくれる。	.718	.516
14. どんなことがあっても妻の味方でいたい。	.714	.510
4. 私は妻に何でも気楽に話せる。	.708	.501
3. 妻は私の嫌がることをしないようにしてくれる。	.707	.500
21. 妻と私はお互いに出会うためにこの世に生まれてきたような気がする。	.707	.500
7. 妻は私に何でも気楽に話してくれる。	.687	.473
22. 妻とは今でも恋人どうしのような気がする。	.657	.432
6. 私と意見が対立するとき妻は何かと妥協点を見出そうと努力してくれる。	.644	.414
23. 妻のことなら、どんなことでも許せる。	.631	.398
	寄与率(%)	55.99

表2 《女性》夫婦関係満足度の項目と因子負荷量

項目	因子負荷量	共通性
12. 全体的にみて私は夫に満足している。	.898	.807
20. 夫と一緒にいると、夫を本当に愛していることを実感する。	.895	.801
18. 夫のためなら何でもしてあげるつもりだ。	.873	.762
14. どんなことがあっても夫の味方でいたい。	.861	.742
9. 夫は毎日の生活を楽しく意味のあるものにするよう努力してくれる。	.861	.741
15. 夫を一人の人間として深く尊敬している。	.857	.734
19. 夫は魅力的な男性だと思う。	.854	.729
13. もう一度生まれ変わるとしても同じ人と結婚したいと思う。	.833	.693
8. 夫は私の欠点だけではなく長所も認めてくれていると思う。	.828	.686
17. 夫は言葉に出さなくても私の気持ちを理解してくれる。	.826	.683
1. 私は夫といくと安らいだ気持ちになれる。	.821	.673
11. 夫は私が生きがいをみつけられるよう助けてくれる。	.814	.673
10. 私が何かしようとする時には夫はたいいてい励ましてくれる。	.811	.663
2. 夫は私に思いやりを示してくれる。	.810	.656
16. 夫が幸せになるのが私の最大の関心事だ。	.810	.656
5. 夫は私がこれまで成し遂げてきたことを認めてくれていると思う。	.806	.649
3. 夫は私の嫌がることをしないようにしてくれる。	.789	.622
22. 夫とは今でも恋人どうしのような気がする。	.785	.616
21. 夫と私はお互いに出会うためにこの世に生まれてきたような気がする。	.781	.609
7. 夫は私に何でも気楽に話してくれる。	.735	.540
6. 私と意見が対立するとき夫は何かと妥協点を見出そうと努力してくれる。	.713	.508
4. 私は夫に何でも気楽に話せる。	.708	.501
23. 夫のことなら、どんなことでも許せる。	.659	.434
	寄与率(%)	65.93

る方略で、「回避」と命名した。因子5は、問題をうまく収めようとし、配偶者に気遣いをする方略で、「和解」と命名した。

(3) 問題対処時の感情

男女別に因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、男女共、同じ項目を有する2因子が得られた（表4、表5）。“好意”、“思いやり”、“優しさ”などの項目を有する因子は「肯定感情」、「憂鬱」、「不幸」、「むなしさ」などの項目を有する因子は「否定感情」と名付けた。

(4) 尺度の構成と信頼性

各尺度の平均や信頼性は表6のとおりである。問題対処方略尺度は、因子ごとに男女別の信頼性係数（ α 係数）を求めたところ、因子5で女性の α 係数が.5835と低いため、その中で最も因子負荷量の低い1項目を減らし、4項目での構成とした。問題対処方略尺度の因子5「和解」における女性の信頼性係数が多少低いものの、その他は.70以上の信頼性係数を有しており、各因子および各尺度の内的整合性が検証されたといえる。以下の分析では、各因子を構成する項目の得点を単純加算し、項目数で割ったものをそれぞれの因子得点とする。

5. その他の変数

(1) 夫婦間の問題

最も重要だと思われる夫婦間の問題について、自由記述で回答を求め、カテゴリー別に分けたものを表7に示す。“その他”には、健康、老後、経済的なことなどがあつた。

(2) 問題が生じた年齢

夫婦間で最も重要であると思われる問題が生じた年齢は、男性平均40.85歳（SD=8.94）、女性平均37.46歳（SD=9.81）であり、結婚をしたばかりの頃から現在まで様々であった。

(3) 問題の深刻さ

夫婦の問題の深刻さは、男性平均2.70（SD=.98）、女性平均2.95（SD=1.13）であった。

表3 問題対処方略尺度の項目と因子負荷量

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
	内省	積極的アプローチ	葛藤	回避	和解	
8. 気がめいったり、憂鬱になる。	.782	-.098	.184	.073	-.130	.677
12. 不安、緊張、落ち着きのなさを感じる。	.764	-.105	.190	.080	.089	.645
18. 心の中で何度も問題を考え、堂々巡りをする。	.681	.149	.249	-.001	.064	.553
2. 普段よりも疲れを感じる。	.674	-.001	.165	.129	-.052	.501
24. 仕事や興味のあることに集中できないと感じる。	.596	.096	.164	.001	.193	.428
20. 問題を話し合えるよう、夫（妻）との時間をもつ。	.006	.873	-.097	.055	.212	.819
23. 夫（妻）と話し合おうとする。	.043	.832	-.093	-.020	.117	.717
1. 夫（妻）と向き合い、じっくり話す。	-.016	.642	-.022	-.080	.074	.425
17. 問題の原因は何かを考える。	.385	.419	.074	-.042	.074	.337
3. お互いに楽しめることを夫（妻）と一緒にする。	-.167	.393	-.138	-.078	.344	.326
16. 実際に自分を煩わせていること以外で、夫（妻）を非難する。	.228	-.070	.778	.192	.061	.702
19. 小さなことで夫（妻）に喧嘩をしかける。	.217	.044	.737	.158	.027	.618
4. 夫（妻）にいやみを言う。	.169	-.091	.655	.176	-.017	.497
21. 問題はすべて夫（妻）の責任であると言う。	.322	-.113	.517	.191	-.077	.427
10. ものにあたったり、壊したりする。	.192	-.054	.388	.121	.187	.240
7. 新たな人との出会いを求めようとする。	-.083	-.041	.135	.681	.000	.491
22. 夫（妻）とは別に、普段より社交的な催しに参加する。	.057	.047	.123	.680	.015	.483
5. 友人と多くの時間を過ごす。	.119	-.038	.138	.582	-.022	.374
13. 新たに、手間のかかる趣味や興味を探す。	.155	-.087	.202	.509	.215	.378
9. 仕事や地域などで、新たに手間のかかる役割を引き受ける。	.015	.013	.062	.475	.212	.275
15. 過去にあった幸せな時を、夫（妻）に思い出させる。	.030	.152	.296	.180	.676	.601
11. 過去にあった夫（妻）との幸せな時を思い出すようにする。	.232	.003	.168	.213	.653	.554
14. 夫（妻）により多くの心遣いをする。	.044	.283	-.145	.028	.482	.336
6. 夫（妻）に対して、普段よりも愛情を身体的に表わすことが多くなる。	-.162	.298	-.175	-.045	.451	.351
25. まるく収めることを夫（妻）に提案する。	.088	.352	.157	.156	.392	.334
寄与率(%)	12.22	10.44	10.06	8.17	7.47	
累積寄与率(%)	12.22	22.65	32.71	40.88	48.35	

表4 《男性》対処時の感情の項目と因子負荷量

項目	因子1	因子2	共通性
	肯定感情	否定感情	
6. 好意	.852	-.147	.748
2. 優しさ	.852	-.104	.763
1. 思いやり	.849	-.183	.754
12. 感謝	.838	-.135	.721
11. 安心	.764	-.242	.642
7. 幸せ	.745	-.307	.649
5. 憂鬱	-.137	.856	.752
10. 寂しさ	-.175	.832	.723
8. むなしさ	-.200	.827	.724
4. 不幸	-.153	.787	.643
9. 失望	-.264	.745	.625
3. 悲しみ	-.129	.724	.540
寄与率(%)	35.10	33.71	

表5 《女性》対処時の感情の項目と因子負荷量

項目	因子1	因子2	共通性
	否定感情	肯定感情	
4. 不幸	.840	-.181	.739
8. むなしさ	.840	-.382	.852
9. 失望	.818	-.401	.830
10. 寂しさ	.801	-.341	.757
5. 憂鬱	.794	-.246	.691
3. 悲しみ	.784	-.193	.653
6. 好意	-.193	.911	.867
1. 思いやり	-.223	.889	.840
2. 優しさ	-.212	.887	.832
11. 安心	-.454	.744	.759
12. 感謝	-.384	.717	.661
7. 幸せ	-.392	.707	.653
寄与率(%)	38.39	37.73	

表6 尺度の平均、標準偏差、信頼性

	度数		平均 (SD)		α 係数		
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
夫婦関係満足度尺度	133	144	5.28 (.85)	4.73 (1.18)	.9647	.9773	
問題対処 方略尺度	内省	133	144	2.41 (.73)	2.85 (.86)	.8094	.8528
	積極的アプローチ	133	144	3.06 (.78)	3.08 (.74)	.7892	.7577
	葛藤	133	144	1.73 (.61)	2.04 (.62)	.8352	.7720
	回避	133	144	1.78 (.56)	2.02 (.63)	.7542	.7138
	和解	133	144	2.30 (.66)	2.19 (.59)	.7298	.6210
感情尺度	肯定感情	131	142	3.30 (.86)	3.07 (.94)	.9312	.9464
	否定感情	131	142	2.18 (.86)	2.54 (1.02)	.9219	.9461

表7 夫婦間の問題

	子どものこと	親や親戚との関係	価値観や考え方の違い	その他
男性	41.4%	27.3%	7.0%	24.2%
女性	34.5%	33.8%	16.9%	14.8%

表8 問題対処方略における問題の種類別の平均と標準偏差

問題対処方略	問題の種類												
	子どもについて			親や親戚との関係			価値観や考え方の違い			その他			
	平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD	N	
男性	内省	2.38	.67	53	2.66	.66	35	2.40	.86	9	2.34	.75	31
	積極的アプローチ	3.05	.65	53	3.06	.78	35	3.09	1.19	9	3.06	.73	31
	葛藤	1.79	.60	53	1.69	.54	35	1.87	.71	9	1.74	.68	31
	回避	1.72	.50	53	1.75	.54	35	1.80	.75	9	1.94	.54	31
	和解	2.26	.55	53	2.34	.67	35	2.03	.65	9	2.36	.61	31
女性	内省	2.72	.79	49	3.11	.83	48	2.76	.80	24	2.78	.98	21
	積極的アプローチ	3.27	.72	49	2.98	.73	48	2.83	.70	24	3.16	.67	21
	葛藤	1.95	.53	49	2.22	.73	48	1.94	.57	24	2.00	.57	21
	回避	2.00	.56	49	2.05	.62	48	1.98	.71	24	2.08	.73	21
	和解	2.16	.49	49	2.21	.64	48	2.00	.54	24	2.44	.70	21

6. 問題対処方略について、問題の種類による差の検討

5つの問題対処方略について、問題の種類の影響があるかを確かめるため、男女それぞれに1要因の分散分析を行った。問題対処方略における問題の種類別の平均と標準偏差を表8に示す。男女とも、問題の種類と問題対処方略との間に有意な関連は見られなかった。したがって、問題の種類を考慮せずに分析をすすめる妥当性が確認された。

7. 問題対処方略について、問題の深刻さによる差の検討

5つの問題対処方略について、問題の深刻さの影響を確かめるため、男女別に1要因の分散分析を行った。問題対処方略による問題の深刻さ別の平均と標準偏差を表9に示す。男性は、対処方略と問題の深刻さとの関連はみられなかった。女性は、対処方略の「内省」が問題の深刻さと関連があり ($F(2,143)=8.18, p < .001$)、問題が「非常に深刻・かなり深刻」と回答した人が、「中程度」や「少しばかり深刻・全く深刻ではない」と回答した人よりも、「内省」の対処方略を多く用いた。女性の「内省」について、「肯定感情」、「否定感情」、「夫婦関係満足度」の3因子との相関をみたところ、以降の関連する分析結果との矛盾はなかった。

表9 問題対処方略による問題の深刻さ別の平均と標準偏差

問題対処方略	問題の深刻さ									
	非常に深刻・かなり深刻			中程度			少しばかり深刻・全く深刻ではない			
	平均	SD	N	平均	SD	N	平均	SD	N	
男性	内省	2.64	.73	24	2.48	.64	50	2.30	.68	54
	積極的アプローチ	3.15	.79	24	2.94	.58	50	3.13	.90	54
	葛藤	1.73	.71	24	1.85	.63	50	1.65	.52	54
	回避	1.73	.61	24	1.87	.50	50	1.72	.56	54
	和解	2.44	.63	24	2.30	.62	50	2.23	.60	54
女性	内省	3.25	.96	44	2.60	.80	43	2.70	.72	56
	積極的アプローチ	3.15	.79	44	3.02	.70	43	3.06	.74	56
	葛藤	2.09	.73	44	1.97	.44	43	2.04	.66	56
	回避	2.08	.77	44	1.94	.53	43	2.02	.59	56
	和解	2.19	.74	44	2.13	.57	43	2.22	.48	56

表10 《男性》対処方略尺度の項目と因子負荷量

項目	因子1		因子2		共通性
	消極的対処	積極的対処	消極的対処	積極的対処	
葛藤	.891	-.090	.802		
内省	.712	.056	.510		
回避	.655	.378	.571		
積極的アプローチ	-.146	.853	.749		
和解	.338	.775	.715		
寄与率(%)	37.30	29.65			

表11 《女性》対処方略尺度の項目と因子負荷量

項目	因子1		因子2		共通性
	消極的対処	積極的対処	消極的対処	積極的対処	
葛藤	.837	-.023	.700		
内省	.741	.183	.582		
回避	.523	-.232	.327		
積極的アプローチ	-.144	.852	.747		
和解	.094	.807	.659		
寄与率(%)	31.04	29.29			

結果

1. 問題対処方略尺度の因子分析

対処方略尺度の因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を男女別に行った（表10、表11）。「葛藤」、「内省」、「回避」は同じ種類の対処方略で、配偶者と建設的に関わらず、問題を避ける消極的な対処である（「消極的対処」と命名）。「積極的アプローチ」、「和解」は同じ種類の対処方略で、配偶者と積極的に関わるものである（「積極的対処」と命名）。

2. 問題対処時の感情と夫婦関係満足度との相関

問題対処時の感情と夫婦関係満足度との相関を表12に示す。「肯定感情」と「夫婦関係満足度」には正の関連があり、「否定感情」と「夫婦関係満足度」には負の関連がある。

表12 問題対処時の感情と夫婦関係満足度との相関

夫婦関係満足度	対処時の肯定感情		対処時の否定感情	
	男性	女性	男性	女性
	.41**	.61**	-.26**	-.37**

注. **p < .01

3. 問題対処方略と問題対処時の感情との相関

問題対処方略と問題対処時の感情との相関を表13に示す。男女とも、「積極的対処」と「肯定感情」、「消極的対処」と「否定感情」に正の関連があり、「消極的対処」と「肯定感情」には負の関連がある。また、「積極的対処」と「否定感情」は、女性のみ負の関連がある。

4. 仮説1の検証（問題対処方略と夫婦関係満足度との関連）

対処方略と夫婦関係満足度との相関をみると、男女ともに、「積極的対処」は「夫婦関係満足度」と正の関連

があり、「消極的対処」は「夫婦関係満足度」と負の関連がある（表13）。したがって、仮説1は支持されている。

表13 対処方略、問題対処時の感情、夫婦関係満足度との相関

		問題対処時の感情		夫婦関係満足度
		肯定感情	否定感情	
男性	積極的対処	.53**	-.05	.41**
	消極的対処	-.17*	.60**	-.30**
女性	積極的対処	.61**	-.25**	.55**
	消極的対処	-.43**	.60**	-.46**

注. *p < .05 **p < .01

5. 仮説2と仮説3の検証（問題対処方略や対処時の感情と「夫婦関係満足度」との関連）

問題への対処方略と問題に対処する時の感情の、夫婦関係満足度への影響を検証するため、問題対処方略の2因子と感情の2因子を独立変数、「夫婦関係満足度」を従属変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を男女別に行った（表14、表15）。男性は、「積極的対処」と「消極的対処」が「夫婦関係満足度」に影響を及ぼしている。「肯定感情」と「否定感情」は、「夫婦関係満足度」への直接的な影響がみられない。女性は、「積極的対処」、「消極的対処」、「肯定感情」が「夫婦関係満足度」に影響を及ぼし、「否定感情」は「夫婦関係満足度」への直接的な影響がみられない。

表14 《男性》「夫婦関係満足度」を従属変数とした重回帰分析

独立変数	標準偏回帰係数
積極的対処	.50***
消極的対処	-.41***
決定係数 (R ²)	.31***

注. ***p < .001

表15 《女性》「夫婦関係満足度」を従属変数とした重回帰分析

独立変数	標準偏回帰係数
積極的対処	.43***
消極的対処	-.34***
肯定感情	.20*
決定係数 (R ²)	.51***

注. *p < .05 ***p < .001

男性は、「肯定感情」が「夫婦関係満足度」に影響を及ぼさなかった。女性では、「肯定感情」よりも問題対処方略が「夫婦関係満足度」とより強い関連があり、「肯定感情」が最も「夫婦関係満足度」に影響するとして仮説2は、男女ともに支持されなかった。しかし、女性においては、「肯定感情」の「夫婦関係満足度」への影響がうかがわれた。

「否定感情」と「肯定感情」には負の相関があり、「否定感情」の裏にあるのが「肯定感情」だと考えると、両感情が無関係であるとは言い切れない。しかし、「肯定感情」の影響を除いた場合、「否定感情」と「夫婦関係満足度」との直接的な関連はなく、男女ともに、仮説3は支持されたといえる。

男性では、「肯定感情」と「否定感情」がそれぞれ「夫婦関係満足度」と有意な相関があるが、重回帰分析では直接的な影響がなかった。この相関の高さは、「肯定感情」、「否定感情」、「夫婦関係満足度」の3変数が、「消極的対処」と相関を有することで生じたと考えられる。また、女性では、「否定感情」と「夫婦関係満足度」に有意な相関があるが、重回帰分析では直接的な影響がなかった。この相関の高さは、「否定感情」と「夫婦関係満足度」の双方が、「積極的対処」、「消極的対処」、「肯定感情」と相関を有することで生じたと考えられる。

総合的考察

40代、50代の中年期夫婦を対象とし、問題への対処方略、問題対処時の感情、夫婦関係満足度との関係に焦点をあてて研究をすすめた。

夫婦間で生じた最も重要な問題は、「子どものこと」、「親や親戚との関係」、「価値観や考え方の違い」が、男性の約75%、女性の約85%を占めている。これらの問題は、中年期特有というより、どの年代にも起こりうる問題である。

問題対処方略は、「内省」、「積極的アプローチ」、「葛藤」、「回避」、「和解」の5つが見出された。「和解」は配偶者の機嫌をとり気遣いをする方略であり、本研究で用いた対処方略尺度のもとになったBowman (1990)の尺度では「積極的アプローチ」に含まれていたものが、ひとつの対処方略として独立している。そのことと項目の内容を考えると、この対処方略は日本人の特徴として考えられるのではないだろうか。同じ概念のものをまとめると、「積極的アプローチ」と「和解」は配偶者と積極的に関わりながら問題を解決する対処方略であり、「積極的対処」とした。「内省」、「葛藤」、「回避」は配偶者と建設的な関わりをせず問題を避ける消極的な対処方略で、「消極的対処」とした。

問題対処方略には、これまでの研究の中で、夫婦関係の質と正の相関があるものと負の相関があるものが見出されている。本研究において、問題が生じた時に配偶者と関わりをもちながら解決しようとする「積極的対処」と「夫婦関係満足度」とは正の関連、配偶者と建設的な関わりをせず問題を回避する「消極的対処」と「夫婦関係満足度」とは負の関連があり、仮説1は支持されている。欧米の先行研究で見出されている、“課題もしくは問題中心の対処”は結婚の質と正の相関があり、“回避中心の対処”は結婚の質と負の相関があるという結果とほぼ一致しているといえる。

考えや感情を率直に表現するコミュニケーションよりも、控えめであることや我慢を美德とし、和を大切にしている日本の文化や、中年期夫婦という年代を考慮すると、問題にどう対処するかということよりも、問題に対処する時に配偶者に抱く感情が、夫婦関係満足度と関連するのではないかと考え、仮説2と仮説3を検証した。「肯定感情」が問題対処方略よりも夫婦関係満足度に関連するのではないかとする仮説2は支持されなかったが、女性において、「肯定感情」は夫婦関係満足度に影響を及ぼすことがわかった。仮説3は男女ともに支持されており、「否定感情」は夫婦関係満足度と直接的な関連がなかった。

女性においては、肯定感情を多くもつようにすれば、夫婦関係満足度が高まるといえる。肯定感情をもつためには、亀口(2000)が夫婦のジレンマを乗り越えるための共通要素として挙げているように、“希望を失わないこと”と“ある種の楽観主義を持ち続けること”が大切だろう。夫婦の関係や状況は変わるかもしれないと考え、好ましくない関係や状況のなかでも、その裏にある良い部分を見出して前向きに過ごすことが、夫婦関係を保つ鍵となるのではないだろうか。

男性では、「肯定感情」と夫婦関係満足度とが関連していない。男性は、女性よりもたいていの感情を自由に表出せずに抑制するように教えられること(Buck, 2002)や、感情表出が社会からも認められ得意とする女性に比べると、男性は概してそれが苦手である(平木・中签, 2006)というように、性役割学習や文化社会的な視点からみた記述がある。それらからは、男性が女性に比べ、感情に重きを置かない、敏感ではないという推察ができ、感情よりも行動(問題への対処方略)が夫婦関係と関連した一因と考えられるのではないだろうか。

否定感情が夫婦関係満足度と直接的に関連しないのは、日本の夫婦が関係を継続できることにつながっているのではないかと推測できる。離婚率をみると、日本2.00%('06)、アメリカ合衆国4.19%('98)、イギリス2.80%('03)である(国連, 2000-2006)。否定感情が夫婦関係を左右しないことが、日本の夫婦の離婚率を低くしている一つの要素であるかもしれない。

また、中年期という年代に焦点をあてて考えると、長い年月を夫婦として過ごしているので、配偶者への否定的な感情を、うまく処理する術を持ち合わせているのではないと思われる。Hechhausen(2001)は、中年期はその時期までに蓄積されてきた成熟した人格によって助けられ、単に穏やかになるという以上に、様々な実際的な対応の仕方を学んでいると述べている。また、夫婦の葛藤場面において、中年期夫婦は、関心やユーモアをより多く表現するという報告がある(Gottman & Notarius, 2000)。これらから、中年期という年代が、否定感

情の軽減や調整を可能にしていることも考えられる。

今後の課題は、次のようなことが考えられる。被験者数を多くした分析、検証が望まれる。一般的な中年期の特徴であることを確認するため、横断的な他の年代との比較や、その年代に特有の出来事の影響を縦断的に検討する必要がある。本研究では、夫や妻が配偶者の問題対処方略や感情をどう認知しているかにはふれていない。認知する配偶者の問題対処方略や感情を考慮することで、夫や妻の対処方略や感情に含まれる配偶者からの影響が見えてくるのではないかと思われる。

文献

- Bowman, M.L. (1990). Coping efforts and marital satisfaction: Mesuring marital coping and its correlates. *Journal of Marriage and the Family*, 52, 463-474.
- Bradbury, T. N. & Karney, B. R. (2004). Understanding and altering the logitudinal course of marriage. *Journal of Marriage and the Family*, 66, 862-879.
- Buck, R. (2002). 感情の社会生理心理学 (畑山俊輝, 監訳) . 東京: 金子書房. (Buck, R. (1988). Human motivation and emotion, Second edition. New York: Wiley.)
- Cummings, E.M., Davies, P.T., & Campbell, S.B. (2006). 発達精神病理学—子どもの精神病理の発達と家族関係— (菅原ますみ, 監訳) . 京都: ミネルヴァ書房. (Cummings, E.M., Davies, P.T., & Campbell, S.B. (2000). Developmental psychopathology and family process theory, research, and clinical implications. New York: The Guilford Press.)
- Driver, J., Tabares, A., Shapiro, A., Nahm, E.Y., & Gottman, J.M. (2003). Interactional pattern in marital success or failure. In F. Walsh(Ed.). *Normal family processes*(pp.493-513). New York: Guilford Press.
- Gottman, J. M. & Notarius, C. I. (2000) Decade review: Observing marital interaction. *Journal of Marriage and the Family*, 62, 927-947.
- Heckhausen, J. (2001). Adaptation and resilience in midlife. In M.E. Lachman(Ed.). *Handbook of midlife development*(pp.345-394). New York: Wiley.
- 平木典子・中釜洋子. (2006). ライブラリ 実践のための心理学3 家族の心理—家族への理解を深めるために—. 東京: サイエンス社
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子. (2006). 夫婦のコミュニケーションと関係満足度, 心理的健康の関連—子育て期のペア・データの分析. 聖徳大学家族問題相談センター紀要. 51-61
- 門野里栄子. (1995). 夫婦の話し合いと夫婦関係満足度. 家族社会学研究. 7, 57-67
- 亀口憲治. (2000). シンポジウム 「心の危機—ライフサイクルにおける転換点」をめぐって: 日本家族心理学会. ジェンダーの病—気づかれぬ家族病理 (家族心理学年報18). 東京: 金子書房. pp.108-118
- 国連. (2000-2006). Demographic Yearbook.
- Moller, P., Feeney, J.A., & Peterson, C. (2001). *Personal relationships across the lifespan* (pp.105-118). New York: Psychology Press.
- 21世紀ひょうご創造協会・兵庫県家庭問題研究所(編). (1991). イギリスの家族関係との比較研究. 兵庫県.
- Rothbaum, F., Pott, M., Azuma, H., Miyake, K., & Weisz, J. (2000). The development of close relationships in Japan and the United States: Paths of symbiotic harmony and generative tension. *Child Development*, 71(5), 1121-1142.
- 袖井孝子・都築佳代. (1985). 定年退職後夫婦の結婚満足度. 社会老年学. 22, 63-77
- 菅原ますみ・詫摩紀子. (1997). 夫婦間の親密性の評価: 自記入式夫婦関係尺度について. 精神科診断学. 8(2), 155-166
- 大和礼子. (2001). 夫の家事参加は妻の結婚満足感を高めるか?—妻の世帯収入貢献度による比較—. ソシオロジ. 46, 3-20
- 善積京子. (2004). スウェーデンの家族とパートナー関係. 東京: 青木書店

付記

本論文は2002年にお茶の水女子大学に提出した修士論文を加筆, 修正したものです。調査にご協力いただいた皆様, ご指導いただいた諸先生方に心よりお礼申し上げます。